

テロルとゴジラ

〈本土決戦〉の想像的回帰としての

1

この春、桐山襲の評伝『テロルの伝説』が刊行された。著者の陣野俊史は一九六一年生で、四九年生の桐山とは一廻り年齢が下になる。連合赤軍事件は小学生、桐山のデビュー作『パルチザン伝説』の刊行は大学三年のときだった。本稿では一

九六〇年代後半の大衆的ラディカルズムを〈68年〉と表記するが、この作家が最後まで執着し続けた〈68年〉を陣野は体験していない。そのため『テロルの伝説』には、〈68年〉世代の読者には少し気になるような箇所が見られる。たとえば桐山襲の『「パルチザン伝説」事件』から、陣野は次のような箇所を引用している。

『「パルチザン伝説」刊行中止という版元の「通告」を受け入れた理由としては』状況からみてこれ以上河出に戦争を継続させるのは無理であると、判断したことがあります。特に私の作風として、戦線離脱者は自由に

去らせるといふことがあるんですね。

(傍点陣野)

陣野は「最初、この箇所を読んだとき、『作風として』という文言は、間違いではないか、と感じ」た。「だが、おそらくそうではない。桐山はここで意図的に『作風』という言葉を用いている。自分の書いた小説が単行本化されえないという破局に突入しつつあるとき、桐山はそうした一連の出来事を、一種の『作品』と捉えていたのではないか」。

桐山の文章にある「作風」という言葉を、陣野は「芸術作品のスタイル」と理解しているが、見当違いである。中国語の「作風」には日本語の場合と違って、「仕事・行動・思想などの体質化された態度、方法」といった意味がある。毛沢東は「文章表現や認識や諸活動における無意識的なもの(文風、学風、党風)を反省的に再「把握し」(『戦略とスタイル』)たと津村喬が書いたのは、一九七一年のことだ。党風とは党の作風である。学生ラディカリストとして〈68年〉を体験した者であれば、作風の意味を陣野のように誤解しないだろう。

新左翼を含むポリシェヴィズム党派に一般的な、戦線離脱の禁止という「作風」や「党風」に桐山は異を唱えたのであって、『パルチザン伝説』の出版中止をめぐる「一連の出来事を、一種の『作品』として捉えていた」わけではない。このとき桐山の脳裏には、脱走者二名を処刑した京浜安保共闘の「作風」、「党風」が浮かんでいたのかもしれない。

こうした齟齬が見られるにしても、ポスト〈68年〉世代で「学生運動と関わりに薄かった」論者が「桐山襲という作家の残した作品が、その重要性とは無関係に、忘れられようとしていることに強い反撥を覚

え、四五〇頁を超える作家論を上梓したことは評価できる。その上で『テロルの伝説』に不満があるとしたら、デビュー作の時点から鮮明だった桐山襲の思想を、われわれの現在に真正面から突きあわせようとしていない点だ。われわれの現在とは、3・11を画期とするポスト戦後の時代に他ならない。

「政治と文学と」どちらか片方の活動を行っている個人もあれば、両方を行っている個人もあるでしょう。しかし、たとえ個人が両方の活動を行っていたとしても、政治的行為と作品の産出とを混同してはならないと思います。(略) 政治的行為と混同されるような形では、文学は現実を変革するものではないと断言すべきでしょうね(「想像力は何を変革しうるか?」、「インパクション」第36号) という発言を引用し、陣野は桐山襲が政治の領域と文学の領域を峻別していたと強調する。

また『テロルの伝説』あとがきでは、「桐山から送られた爆弾Ⅱ小説は、未来のテロルを準備するだろう」と記されている。しかし、ここでの「未来のテロル」はマラルメ的な「文学の革命」を意味するにすぎない。極限では即物的な爆弾にまで到達しうる政治行動の場に身を置いていたとしても、それは桐山の小説作品とは別次元の問題ということになる。

政治行動も文学表現も同じ人物による以上、両者を完全に切断することは不可能だ。日常生活と政治行動と文学表現のいずれもが、それぞれに桐山の思想を表現している。桐山作品に込められた(68年)の思想的意味が歴史的に失効すれば、文学的な「未来のテロル」など「準備」されようもない。

桐山襲という作家が忘却の淵に沈もうとしている事態に、陣野俊史は危機感を覚えた。死亡した作家や活動を終えた作家が忘れ去られるのは、さほど珍しいことではない。死後二〇年以上を経過してもなお、著作が新刊書で入手できる作家のほうが少数といえる。しかし桐山作品が蒙った「忘却」には、大多数の作家た

ちとは異なる独自の背景がある。桐山の小説作品と不可分である(68年)の体験と思考が、いまや陥っている忘却の危機とそれは無縁でない。とりわけ深刻なのは、新世代の政治的アクティヴ層に後継者を見出しえず、むしろ冷淡に見放されていることだ。たとえば奥田愛基は、高橋源一郎やSEALDsメンバーの座談会『民主主義ってなんだ?』で「六十年安保とベ平連についてはいいところを取ろうと思ってい」るが、「大学を占拠して七十年安保の感覚が全く分からない」と語っている。

(68年)体験から抽出された桐山襲の思考は、一九八三年に河出書房新社の「文藝」に掲載され、八四年に作品社から刊行された『バルチザン伝説』で明確に語られている。「僕たちの世代は、そのほとんどが、あの十五年戦争に多かれ少なかれ責任をもった者を父とすることによって産まれてきたのだが、中枢においてあれ末端においてあれ、手を汚すことによって生きてきた(父たちの体系)ともいうべきものは、僕たちの出生によって打ち碎かれねばならないと、僕たちは幼い頃から考えつづけてきた」。

父たちは十五年戦争のただなかで、大陸の村々を焼きはらい、半島の女たちを強姦し、そして自分たちも数多く死んでいったのだが、戦争が終わってみれば、生き残った者たちはひとりひとりの持つ血の負債を支払いを付けることもせず、この国の「復興」の歩調に己れの人生を合わせていくことによって、死者たちの国に易々と別れを告げてしまったのだった。

こう語るのには「首都の真中にある奥深い森のなかに棲んでいるあの男への、大逆」を企てようとしている「反日であることを永遠の綱領とした」小グループの一員で、のちに爆弾製造の失敗のため片眼と片腕を失

い《昭和の丹下左膳》となる青年だ。作中の小グループが、東アジア反日武装戦線「狼」をモデルとしていることは指摘するまでもない。「大逆」の計画とは、「狼」が決行直前に中止した荒川鉄橋での天皇暗殺計画（虹作戦）を下敷きにしている点も。

かくて、〈父たちの体系〉を全否定することは、僕たちの世代のまぎれもない義務であり、大人たちの偽善の世界をこなごなに打砕くことは、僕たちの世代のほとんど唯一の存在理由であるように思われた。戦前が許せない以上に、いつわりの自由といつわりの平和でみたされた戦後こそが、僕たちには耐えることができなかった。

だから「大逆」が実行されなければならない。「茶色い戦争の時代の大元帥から、戦後のものやさしげな家庭人へと、巧妙に退却していったあの男は、戦中と戦後を生きたすべての『大人たち』の最も見事なモデル」なのだ。

一九七〇年七月七日に日比谷野外音楽堂で開催された「盧溝橋事件三三周年、日帝のアジア再侵略阻止人民集会」で、華僑青年闘争委員会（華青闘）は中核派など日本の新左翼にも浸透している差別主義と排外主義、先進国革命主義による自己特権化を厳しく批判した。華青闘の告発によって日本の〈68年〉は、反差別闘争やマイノリティ解放運動の領域を新たに発見するが、それはまた血債主義という倫理主義的倒錯を生じさせた。

7・7華青闘告発への応答として生じた「反日」思想の、作者による虚構的な理念化として、桐山による〈父たちの体系〉批判を読むことができる。ただし「血の負債」という言葉こそ用いているが、主人公の青年に倫理主義的倒錯の気配は感じられない。自責や負い目という否定的感情を糧に増殖する倫理主義的観念は醜悪だ。そこには、常に正義の側に身を置いていたいという自堕落な欲望が淀んでいる。

六〇年安保以前から「反日帝」は、対米従属論の共産党に対抗して新左翼が掲げた綱領的主張だった。しかし「反日帝」の立場と「反日」の思想は質的に異なる。長いあいだ中国共産党は、一五年戦争期の中国侵略に責任があるのは日本帝国主义／日本軍国主義の支配層で、日本人の責任追及はしないという立場だった。このように「反日帝」の立場は、戦争指導層や軍上層部や独占資本と一般民衆を質的に分割し、後者の戦争責任を免罪しうる。被害者意識を前提とした戦後平和主義も、〈父たちの体系〉を問わない点で同じような認識を共有していた。しかし「反日」は、「反日帝」のような支配層と民衆の分割と、後者の理念的救済を容認しない。民衆にも加害責任はあるという認識が、「反日」には込められていた。さらに東アジア民衆にたいする加害と侵略の責任は、戦前／戦中という過去の問題に限定されえない。それは戦後責任として、8・15以降の日本人にも及んでいる。

三菱重工本社の爆破をめぐる「狼」は、丸の内を通行中に爆死した「彼らは、日帝中枢に寄生し、植民地主義に参画し、植民地人民の血で肥え太る植民者である」という声明文を公表した。多数の通行人を巻き添えに殺傷した予想外の結果を、この声明文によって「狼」は事後的に正当化したことになる。二世紀のジハデイストは反イスラム十字軍国家とその国民を、あるいは支配層と民衆を区別しない「狼」と同型的な論理で、アメリカ市民やフランス市民への無差別テロ作戦を展開している。

華青闘による新左翼の差別主義への批判は、セクト的な大衆運動支配と先進国革命主義／労働者本隊論に

も及んでいた。マルクス主義の先進国革命主義は、先進諸国の革命こそが世界革命の基軸であり、植民地・従属国の解放は帝国主義本国の革命に依存するという観点から、第三世界の闘争を世界革命の従属的な一部にすぎないものと把握する。また帝国主義本国に流入した植民地出身者の闘争もまた、労働者本隊の解放闘争の下位に位置づけられた。日帝と闘う日本プロレタリアートの前衛の「指導」に、在日中国人の運動は従わなければならないというポリシェヴィキ的な前衛主義が、中核派の入管闘争と華青闘にたいするセクト主義的干渉や引きまわしを正当化していた。

7・7以降も中核派を含む新左翼党派のほとんどが、マルクス主義的な先進国革命主義／労働者本隊論やポリシェヴィズムの前衛主義への原理的批判を回避し続けた。せいぜいのところ、帝国主義への物理的打撃力としてのみ植民地・従属国の解放闘争を評価するコミンテルン第二回大会「民族・植民地問題についてのテーゼ」をもちだす程度で、こうした理論的貧困と思想的感度の致命的な鈍さが新左翼の歴史的限界をなしている。血債主義という倫理主義的倒錯は、こうした認識上の空隙から必然的に成長した。ちなみに中核派の血債主義の空虚な内実と観念的倒錯性は、水谷保孝・岸宏一『革共同政治局の敗北』、尾形史人『革共同五〇年』私史』など元中核派活動家による総括書でも、自己批判的な要素を含んだスタンスで検証されている。

『狼』事件で袋小路に迷いこんだ「反日」思想は、その後も新左翼党派の血債主義として存続し、建前化されながらも命脈は細々と保たれてきた。ところで、『3・11後の叛乱』の先導者の一人である野間易通は、筆者との交換エッセイで「『国民』をも自分たちの側に取り戻そうとする動きが、3・11以降のリベラル社会運動には確実に存在する」と主張している。

実際、「国民」という言葉に拒否反応を示す人々は単に多様性を重視するコスモポリタンであったただけではなく、同時にこの国民国家の枠組みのなかで「国民」としてどう主体的に振る舞うかという視点を欠く傾向が強いと思う。護憲を主張しながら、憲法に主権者として明記されている主体である「国民」であることを放棄して、実際には存在しない世界市民、地球市民のポジションにみずから身を置くことでその責任から逃れてきたのではないか。

(『3・11後の叛乱』)

東アジア反日武装戦線のメンバーは「『国民』であることを放棄して、実際には存在しない」東アジア民衆という観念の「ポジションにみずから身を置くことでその責任から逃れ」たのではないか。もちろん「『国民』であることを放棄」し、東アジア民衆という観念に同化するのには容易でない。逮捕、投獄、最終的には処刑という運命を意識しながら爆弾闘争を継続しなければならぬのだから。『狼』に共有されていた侵略者の子孫であるという強烈な自罰意識と、それを原動力として極限まで突進したラディカリズムは、日本の政治思想では特筆されるべき強度を達成していた。新左翼党派の血債主義も護憲派やリベラルの「世界市民」主義も、『狼』の「反日」思想の微温的な頹落形態にすぎない。

二〇一五年夏の国会前で露呈されたのは、若者たちの「国民なめんな」と、微温化した血債主義や世界市民主義の原理的な対立だった。この対立は二〇一二年の反原発闘争を起点とする。金曜首相官邸前抗議行動を主催した反原連に、新左翼党派や化石化した〈68年〉世代の中高年が非難を浴びせた。それは二〇一三年の反排外主義運動に引き継がれ、新大久保に登場したレイシストをしばき隊やカウンター大衆に、やはり新

左翼由来の反差別運動の活動家が対立した。国会前でのSEALDsや「あやらし」と中核派や文化左翼の対立劇は、第三幕ということになる。これらの対立の意味するところについては、先述の『3・11後の叛乱』を参照していただきたい。

3・11以降に顕在化した事態に桐山襲は、あるいは「父たちの体系」の爆破を企てた『バルチザン伝説』の主人公はどのように対しうるのか。高橋源一郎や坂本龍一に代表される〈68年〉世代の多数派と歩調を合わせて、『昭和の丹下左膳』もまたリベラルや戦後民主主義に回帰したろうか。あるいは還暦を超えた元新左翼や元全共闘の一部のように、「若者なら国会に突っこめ」という無責任な怒声を発したろうか。もしも桐山襲を論じるなら、今日では避けられない問いがある。『バルチザン伝説』に込められた「反日」の思想、あるいは「反日」にまで先鋭化した日本の〈68年〉の運命をめぐる問いだ。

3・11によって、桐山が執着したテロルのリアリティは最終的に失われ、その思考もまた失効を宣告されたのではないか。こうした問いを『テロルの伝説』は、自覚的に問おうとしていない。とはいえ、これは陣野のような後続世代ではなく、当事者である〈68年〉世代に課せられた作業だ。とりあえず〈68年〉の思考による戦後思想（戦後平和主義／戦後啓蒙主義／戦後民主主義）への批判を、簡単に振り返るところからはじめることにしよう。

戦争被害を国民の共同体験として一方的に強調し、戦争と軍国主義への「逆コース」反対運動に終始する社共総評など戦後革新勢力と進歩派知識人の戦後平和主義に、〈68年〉は戦争の加害責任を対置した。一九五〇年前後にはじまる「逆コース」反対運動は六〇年安保闘争で頂点にいた。新安保条約を強行した岸内閣は総辞職に追いこまれ、自民党の主導権は所得倍增計画の池田内閣以降、軽武装・経済優先の吉田路線を継承する保守本流に移行した。

改憲再軍備派の「逆コース」路線が後退した一九六〇年代には、労働組合は春闘などの経済闘争に埋没し、戦後革新勢力の政治闘争は急速に形骸化していく。市民運動や学生運動を中心とするヴェトナム反戦闘争は、「戦争に巻きこまれる」危機意識を発条にしたところの、被害者意識による戦後平和主義とは次元の異なる認識に導かれていた。ヴェトナム戦争をめぐる対米軍事協力の数々が、日本人もまた戦禍に苦しむヴェトナム民衆の加害者だという事実を突きつけたからだ。この時期、小田実による「被害者＝加害者のメカニズム」論が反戦市民運動に多大の影響を与えた。

ヴェトナム反戦闘争の過程で自覚された日本人の加害者性は、一九七〇年の7・7華青闘の告発を転機として、旧日本帝国によるアジア侵略にまで遡って再把握されていく。「僕たちの世代の叛乱のその頂点において産み出された僕たちのグループ」の「反日」〈父たちの体系〉を爆破しようとする子たちのテロルは、日本の〈68年〉が到達した思想的な極点だった。しかも復活した新日本帝国は入管体制など旧植民地出身者への差別構造を温存し、さらに強化しながらアジアへの経済侵略を進めている。旧日本帝国の侵略責任と加害責任の徹底追及は、新日本帝国としての戦後国家、平和と繁栄を謳歌する戦後社会の全面拒否にまでいった。

〈68年〉のヴェトナム反戦闘争は戦後平和主義と対決した。また全共闘運動は大学自治＝教授会自治を批判して、戦後啓蒙主義を疑おうとしない大学教員や戦後知識人を批判した。選挙と議会に民主主義を縮減し、大衆運動をその補完物に矮小化する戦後民主主義には街頭行動の直接民主主義が対置され、機動隊との実力対決が運動の尖端部を軍事闘争に向かわせた。類似の例として、西側先進諸国で都市ゲリラ闘争を展開した

イタリヤの赤い旅団や西ドイツ赤軍がある。このように〈68年〉の実践的な戦後思想批判は、戦後平和主義／戦後啓蒙主義／戦後民主主義の総体に及んでいた。これら三者を一括して「戦後民主主義批判」とする場合もある。

一九七一年の三里塚闘争と沖繩闘争を最後の頂点として、日本の〈68年〉は急速に退潮していく。それを加速したのが連合赤軍の連続『総括』死、『狼』による無差別爆弾テロ、革共同両派と革労協による内ゲバ戦争という、『昭和の丹下左膳』がめざしたテロルの陰惨な疎外形態だった。『バルチザン伝説』の主人公によれば、「一九六〇年代末期の街路という街路を乾いた風のように駆け抜けていった学生の社会的叛乱」は終息し、「この国はいっさいの戦後のなものを清算し終えて、すでに最悪の華やかさともいいうべき所へと進み込んでいた」。こうした時代的必然に渾身の力で抗おうとした、「反逆者の極北たることを志して産まれた僕たち」の「大逆」は不発に終わる。現実世界でも東アジア反日武装戦線は、もろもろの計算違いのため無差別テロとなった三菱重工本社ビル爆破によって孤立し、公安警察の捜査網に包囲され壊滅していく。

『バルチザン伝説』の主人公が「僕たち」を主語として語るところの侵略責任や加害責任は、かつて〈68年〉の思想として青年ラディカリストに共有されていた。それを後追的になぞったにすぎないなら、この小説は作品外の要素に依存しているといわざるをえない。しかし『バルチザン伝説』は東アジア反日武装戦線の意識的な認識や主張を超え、その無意識的領域にまで踏みこんでいる。作中の一九七四年の「大逆」は『狼』の〈虹作戦〉がモデルだが、さらに作者は一九四五年に企てられた架空の「大逆」を設定している。

『バルチザン伝説』の構成は以下のようなようだ。最初に一九七四年の「大逆」の顛末を語った「第一の手紙」が置かれる。続いて主人公の父親らしい穂積一作について語る「Sさんの手紙」。二つの「大逆」の意味を問

う「第二の手紙」が最後に位置する。ようするに、主人公の一人称である「第一の手紙」と「第二の手紙」という額縁に、穂積をめぐる「Sさんの手紙」が嵌めこまれた構造だ。

「Sさんの手紙」によれば対米戦争の末期に、バルチザンを自任する新聞記者の穂積がSを訪れてくる。穂積に説得されたSは破壊工作に必要な爆弾の製造を引き受ける。戦争体制を攻撃するために爆弾を仕掛けるのは、〈影男〉なる正体不明の盗賊だ。「穂積を情報部とし、〈影男〉を軍とし、私を兵器廠とする戦線がここに結成された。やがてそれは、ひとつの荒ぶる生きもののように頭をもたげ、立ち上がり、歩み出し、そして敗戦間近い日本の夜のなかを疾駆していくのである」。ソ連が参戦し原爆が投下される。日本政府がポツダム宣言を受諾するという情報を得た穂積は、「ヒットラーは滅んだ、ムッソリーニも滅んだ、だが日本は敗れても天皇は残る。何も変わらない。すべての大本が元のままだからだ」とSに告げる。「……せめて、本土決戦でも始まっていればな——」と。

私「本土決戦？」

彼「そうさ、本土決戦で国土が蹂躪され、そして国土と同じようにこの国の大本が蹂躪されたその上で敗けるのならば、少しは違ってくると思うがな」

私「少しおかしくないかな」

Sは穂積の発言が「まるで陸軍の連中の言うことと同じようだ」と思い、そして反論する。「日本の敗戦は一日でも早くなければならぬ。そのために我々は工作を始めたはずではないか。(略)それを、本土決

戦が必要だと言い出すのは、飛躍が過ぎるね」。穂積は応じる。「なるほど、我々三人は、日本の一日も早い敗戦のために闘った。しかしそれは、日本の上から下までの支配秩序を倒すためであって、その支配秩序を残したまま単に戦争だけを終わらせるためではないはずじゃないか。そうではないかい？」。

しかし二人の議論は噛みあわない。《今日からは、俺ひとりかパルチザンだ》という言葉を残し、最後のひとつとなった爆弾を手にして穂積はSの前から立ち去る。「Sさんの手記」の終わりには、《一九四五年八月十四日の伝説》が挿入されている。Sが想像するところでは、天皇の詔勅による「終戦」を阻止するため、穂積は爆弾を携えて皇居に潜入した。「あと半年戦争が続けば、この国は第一次大戦後のドイツがそうであったような炎と可能性で彩られた日々を迎えることができるかも知れない」。

この小説が応募された文藝賞の選考委員として、「作者は戦争中の日本を、自己のものとしていず、そこからこの作品の破れ目があらわに見えてくる」と野間宏は評した。「暗い絵」や『青年の環』で描かれたような体験をもつ戦中派の野間には、穂積一作の人物像や戦時下でのパルチザン闘争という設定が、リアリティ皆無の幼稚な空想にすぎないと思われたのだろう。

篠田一士の書評で「劇画調」と評された作品のテイストからも想定できるように、設定や人物のリアリズム小説的なりアリテイの希薄さに作者が無自覚だったとはいえない。リアリズム小説では、パルチザンが「大逆」を計画する架空の「戦争中の日本」は説得的に描きえない。寓話的ともパロディ的ともいえるテイストは、こうした認識を前提とした作者の自覚的な方法意識による。

丸山眞男のようなリベラリストから植谷雄高や荒正人など戦前共産党の党员やシンパだった「国内亡命者」たちまで、日本の戦後知識人は〈本土決戦〉を渴望する穂積でなく、次のようなSの発言に賛同したる

う。「ともかく日本は一両日中に降伏するという。この降伏を一番喜ぶのは東亜の人たちではないかな。そして日本の罪のないひとびとも第三の原子爆弾で死なずにすむ。これは連合国の勝利であると共に、我々の勝利でもあると思うね」。

戦時天皇制の侵略と抑圧に抵抗する側から〈本土決戦〉の要求が生じうることなど、日本の戦後思想には理解不能、想像不能だった。敗戦後に共産党に入党する野間宏にしても。戦時下の日本で破壊活動に挺身するパルチザン三人組という設定の空想性以上に、穂積が語るころの本土決戦主義への違和が、野間による『パルチザン伝説』評の背景にはあったのかもしれない。第一次大戦の渦中でレーニンが唱えた革命的祖国敗北主義や「帝国主義戦争を内乱へ」のスローガンを、コミニスト野間が知らなかったわけではない。にもかかわらず穂積の主張に違和を覚えたのは、その本土決戦主義にレーニンの革命的祖国敗北主義から逸脱する過剰性が含まれているからではないか。

Sの側に立つことを自明としない稀有な思想家が、「戦旗」派のプロレタリア文学やスターリン主義芸術理論を徹底的に批判した吉本隆明だった。皇国青年として大東亜戦争を支持していた吉本は、戦中の転向は偽装だったと称して敗戦直後に大量復活したりベラリストやコミニストを、「戦争傍観者」にすぎないと全面否定した。「思想的不毛の子」というエッセイで、吉本は自身の敗戦体験を語っている。

わたしは敗戦のとき、動員先からかえってくる列車のなかで、毛布や食糧を山のように背負いこんで復員してくる兵士たちと一緒にになったときの気持ちを、いまでも忘れない。いったい、この兵士たちは何だろう？ どういう心事でいるのだろうか？ この兵士たちは、天皇の命令一下、米軍に対する抵抗も

やめて、武装を解除し、またみずから支配者に対して銃をむけることもせず、嬉々として(?)食糧や衣料を山分けして故郷にかえっていくのは何故だろう? 日本人というのはいったい何という人種なんだろう。

しかし「兵士たちをさげすむことは、自分をさげすむことであった」。熱烈な皇国青年で本土決戦派だった吉本自身が、占領軍を敵として民族解放のバルチザン戦争を開始するどころか、石ころひとつ、卵ひとつ投げることもさえてできないのだ。「このつきおとされた汚辱感のなかで、戦後がはじまった」。この「汚辱感」を戦後思想は共有することがない。泥のような無思想と無節操の沼地に沈んでいる大衆を、「啓蒙」の対象としか捉えようとしてない。こうした戦後思想に吉本は強い口調で異を唱え、「嬉々とし」た復員兵士に体现される大衆の「自立」に、唯一の思想的活路を見出そうとした。

国内亡命者や戦争傍観者に主導された戦後思想の徹底的な批判者だった吉本隆明でさえ、穂積が語るような本土決戦主義は〈68年〉の時点でも拒否したろう。〈本土決戦〉から逃亡したという「汚辱感」こそ吉本の思想的出発点だった以上、それも当然のことだ。消費社会の到来を大衆の解放と見なした一九八〇年代や、憲法九条擁護の立場を打ちだした九〇年代以降は、戦後社会の「平和と繁栄」を全肯定する立場が明確になる。

戦後民主主義／戦後平和主義／戦後啓蒙主義を三位一体とする戦後思想からも、戦後思想の批判者である吉本隆明からも拒否される『バルチザン伝説』の本土決戦主義だが、これをレーニンの革命的祖国敗北主義に過不足なく還元できるだろうか。作中で穂積が語るように、革命的祖国敗北主義の典型的な事例として一九一八年ドイツの兵士叛乱がある。キール軍港の水兵叛乱にはじまるドイツ革命が、皇帝ザイルヘルム二世を打倒して戦争を終結させた。第二次大戦でもドイツは首都陥落と最高戦争指導者ヒトラーの自殺まで徹底抗戦し、イタリアでは蜂起したバルチザンがムソリーニを処刑した。しかし日本では、吉本隆明が「日本人というのはいったい何という人種なんだろう」と自問せざるをえない事態が生じる。

革命的祖国敗北主義と『バルチザン伝説』の本土決戦主義は等置されえない。ドイツやイタリアとは事情が根本的に異なるからだ。自己保身のため徹底抗戦を放棄した支配層、それを革命的蜂起で打倒することのない民衆。支配層と民衆の無節操な共犯システムを根本から打ち砕かない限り、この国で革命的祖国敗北主義を提起しても実効性はない。穂積の本土決戦主義は、言葉の上では革命的祖国敗北主義を踏襲しているようだが、それには尽くされない過剰性がある。〈本土決戦〉は第二次大戦の戦争指導層の打倒を超えて、たとえば敗戦を「終戦」に変えてしまうような、日本に固有である精神的類落との徹底的な闘争を意味するからだ。筆者は『8・15と3・11』で、この類落した精神性をニッポン・イデオロギーとして論じた。

『墮落論』で語られているように文学的本土決戦派だった坂口安吾には、「統戦争と一人の女」という短篇小説がある。ヒロインは作品の最後で、「もう戦争がなくなったから、私がバクダンになるよりほかに手がないのよ」と叫ぶ。この言葉はヒロインの息子たち、娘たちの世代によって即物的に生きた。「私がバクダンになる」という言葉に込められた衝動を無意識に抑圧することで戦後思想は成立しえたのだが、しかし抑圧されたものは必然的に回帰する。たとえば〈68年〉のテロルとして、あるいは一九五四年に日本を襲ったゴジラとして。

日本の〈68年〉が到達した「反日」の無意識を照射するため、桐山襲は一九七四年の「大逆」に先行する

一九四五年の「大逆」を設定した。子の世代の「大逆」が無意識化していたのは、8・15を拒否し本土決戦に突入するという父の世代が封印した禍々しい可能性だった。〈68年〉の「反日」とは〈本土決戦〉から逃亡し、逃亡した事実さえも忘却し去った戦後日本への「反」に他ならない。〈68年〉が武装闘争や軍事闘争の領域に触れようとしたのは、〈本土決戦〉の遂行を無意識的に欲望していたからだ。これが「僕たち」のテロルの隠された意味だったことを、『バルチザン伝説』は虚構として説得的に提示しえている。とはいえ、本土決戦が放棄され曖昧きわまりない「終戦」が到来した根拠を、『バルチザン伝説』は充分には明らかにしえていない。連合赤軍事件をモデル化した第二作『スターバト・マーテル』で、この限界はさらに増幅されている。ここで『8・15と3・11』のニッポン・イデオロギー批判を、要約的に紹介しておこう。

一五年に及んだ対中戦争と対米戦争を歴史的に検証してみると、日本の戦争指導層の妄想的な自信と空想的な判断、裏づけのない希望的観測、無責任な不決断と混乱、その場しのぎの泥縄的な方針の乱発などが洗いだされてくる。たとえば日本の中国侵略は、満州事変にはじまり日中戦争で決定的に拡大し、対米関係の悪化を必然化した。この過程そのものが判断主体不在の無責任体制によるもので、しかも既成事実を拒否できない情性に流されて対米開戦にいたる。

国力の圧倒的な差から敗北必至の戦争であることは容易に予見できた。「清水の舞台から飛び降りる」(東条英機)という「決断」の背景には、緒戦での軍事的勝利によって早期講和にもちこむ「計算」があった。しかしアメリカが講和を拒否したらどうなるのか。この可能性を事前に予測し検討した形跡はない。第一次大戦の結末からも明らかであるように、そもそも二〇世紀の世界戦争は一九世紀の国民戦争と違って、対戦国の壊滅と体制崩壊まで戦争は終わらない。アメリカによる早期講和の拒否は、可能性でなく必然性だった。

二〇世紀の世界戦争の質を洞察しえず、日露戦争の延長で日米戦争を捉えてしまう歴史意識の致命的な欠落もまた、ニッポン・イデオロギーの症状に他ならない。マルクスはドイツ以东の諸民族を「歴史なき民」と侮蔑し、先進国革命主義に帰結する西欧中心主義の本性を自己暴露しているが、「歴史なき民」との評言はロシア人より日本人にふさわしい。

ニッポン・イデオロギーの徒は、最悪の事態を想定し備えようとしなない。考えたくないことは考えない、考えなくてもなんとかなるといふ情性的無思考に流され、たんなる「空気」で後戻り不能の地平に踏みこんでしまう。その末の惨敗として8・15が到来した。

ポツダム宣言の受諾もまた「空気」で決定された。緒戦の勝利で高揚していた「空気」はガダルカナル戦の敗北以降しだいに失われ、原爆投下とソ連参戦で完全に抜けてしまう。沈滞した「空気」に流されて、最高戦争指導会議は八月一日にポツダム宣言の受諾を決定する。この期に及んでも国体護持に拘泥するといふ迷妄をさらけ出しながら。世界戦争の敗北を受け入れるとは、戦勝国による自国の旧体制の破壊に合意することを意味する。法的形式がどうであろうと、降伏は本質的に無条件降伏以外のなものでもない。天皇を主権者とする国家も、対米戦争を惹き起こした旧体制も継続など許されるわけがない。「空気」ではじまり「空気」で終わった戦争の結果が、アメリカの戦略爆撃で焼け野原と化した日本列島と、三〇〇万を超える膨大な戦争犠牲者だった。

八月九日の最高戦争指導会議の直後から、陸軍は鈴木内閣を打倒し本土決戦内閣を擁立するクーデタを画策していた。しかし、一四日の会議直前に梅津参謀総長と阿南陸相が中止を宣言し、クーデタ計画は土台から吹き飛んでしまう。陸軍省幕僚と近衛師団参謀がポツダム宣言受諾の玉音放送を阻止するため皇居制圧に

動き、いわゆる宮城事件が勃発するが、本土決戦派による玉音盤の奪取は失敗に終わる。

ポツダム宣言を受諾して降伏すれば、国際社会のメタレヴェルに〈世界国家〉が析出され二〇世紀の世界戦争が終結するまで、半永久的にアメリカの属国になる。そのあとは〈世界国家〉に支配される地球上の地域に。この運命に最後まで抵抗しようとするなら、中国共産党の抗日人民戦争のような、あるいは六〇年代後半にヴェトナムで戦われ、今日もアフガンで戦われているような反米バルチザン戦争を永続化するしかない。しかし情性的無思考のぬるま湯に馴れきった日本人に、残酷で長期にわたるゲリラ的な抵抗戦という発想はそもそも存在しない。

ポツダム宣言の受諾は無条件降伏を意味する。しかし天皇が朗読した詔書に、「降伏」や「敗北」という言葉は見られない。「戦局必ずしも好転せず、世界の大勢また我に利あらず」、「而も尚交戦を継続せむか、終に我が民族の滅亡を招来するのみならず、延て人類の文明をも破却すべし」。このように天皇を含めた戦争指導層の、現実を直視しない自己欺瞞と責任回避、卑屈な弁解によって塗り潰されている。

無条件降伏による敗戦は、「終戦」という曖昧な言葉にすり替えられた。魯迅が描いた阿Qの奴隷根性そのものだが、少なくとも中国人は抗日戦争の道を選択し、日本軍を中国大陸から放逐するまで戦い抜いた。敗北を敗北として認めることから抵抗は開始されうる。8・15は敗戦でなく終戦だ、日本は負けていないと自分から信じこんでしまえば、そもそも抵抗する必要さえない。自己保身のためになされる姑息な自己欺瞞もまた、ニッポン・イデオロギーの必然的な産物といえる。

また終戦詔書には、「朕は帝國と共に終始東亞の解放に協力せる諸盟邦に對し遺憾の意を表さざるを得ず」とある。このように東亜解放という「聖戦」の理念は放棄されていない。戦後日本の右派潮流である改憲再

軍備派は、天皇の終戦詔書をイデオロギー的な原点とする。三〇〇万の戦争犠牲者を裏切り、本土決戦に日和見を決めこんで姑息な延命をとげた戦争指導層から、岸信介などの改憲再軍備派は形成された。二一世紀に入って保守本流の追いつきに成功した改憲再軍備派は、岸の孫である安倍晋三首相のもと宿願の改憲に向かおうとしている。

徹底抗戦を回避して曖昧な「終戦」に流れこんだ日本人は、戦後復興と高度経済成長に邁進する。その時代に生まれ育った『バルチザン伝説』の主人公は、「戦前が許せない以上に、いつわりの自由といつわりの平和でみたされた戦後こそが、僕たちには耐えることができなかつた」と戦後日本を糾弾する。

穂積一作が希求したのは、考えたくないことは考えない、考えなくてもなんとかなるという日本の無思考と、徹底的であることを自己保身的に回避する権力と民衆の共犯システム、ようするにニッポン・イデオロギーとの全面対決だった。〈本土決戦〉の業火のなかでしか、この闘争は実現されえない。穂積のような〈本土決戦〉の要求を戦後社会は無視し、あるいは欺瞞的に隠蔽してきた。この欺瞞を暴きたすために作者は、消去された可能性の歴史と、その人格化である可能性の父を描いた。ニッポン・イデオロギーと死活の闘争を演じる穂積とは、〈68年〉世代が切望した可能性の父に他ならない。

しかし「僕たちの世代のほとんど唯一の存在理由」だった「大人たちの偽善の世界をこなごなに打砕く」ための「大逆」としてのテロルは、現実世界でも『バルチザン伝説』の虚構世界でも未遂に終わった。「狼」の〈虹作戦〉だけでなく、この小説は連合赤軍事件にも言及している。

その「事件」は、自分たちの党の半ばを肅清してまでも銃撃戦を貫徹しようとする、そうした強固な

党派がこの国に生まれ出たことによって、公安の犬どもを大いに震撼させたのだけでも、同時にまたその「事件」は、僕を含めて一九六〇年代からの闘いを闘ってきた者たちを、《党》に対する激甚な判断停止の状態に落し込んだ。

このように「銃撃戦」は「公安の犬どもを大いに震撼させた」として肯定され、「《党》に対する激甚な判断停止の状態に落し込んだ」として「粛清」には疑問が付されている。その上で両者は、「自分たちの党の半ばを粛清してまでも銃撃戦を貫徹しようとする（略）党派」として関係づけられてもいる。とはいえ「激甚な判断停止の状態」と弁明されているように、連合赤軍事件をめぐる思考は不徹底なまま放置されている。この不徹底性は、連続「総括」「死を粛清と同一視している点にも見出される。連合赤軍事件の死者は、たとえばモスクワ裁判の被告たちのように「帝国主義のスパイ」や「反革命分子」として粛清されたわけではない。

『バルチザン伝説』の背後に東アジア反日武装戦線「狼」の〈虹作戦〉があるように、『スターバト・マーテル』には、連合赤軍の連続「総括」「死が陰気な影を落としている。この作品に登場する銃砲店の主人は、兵士として大陸で戦った経験から「彼ら革命軍は、銃を手にすることによって世界が変革され得るといふ幻想によって滅んだのではなく、銃を手にすることによって自分たちが変革されう得るといふ幻想によって滅んだ」のだと思う。この言葉に込められた連合赤軍事件の総括視点は示唆的だ。しかし物語は、銃砲店の主人の言葉が暗示する方向に深められることなく、桐山襲という作家につきまとう叙情趣味に無力に沈んでしまう。銃撃戦の肯定と、連続「総括」「死の犠牲者を救済したい」といふ願望が先行し、主題は空転していると

いわざるをえない。

『スターバト・マーテル』の冒頭で、銃撃戦の現場となる山荘に《黝い恋人たち》があらわれる。二人は山岳アジトで死亡した恋人たちの亡霊で、モデルは最初の犠牲者だった小嶋和子と加藤能敬だろう。あるいは一四人の犠牲者全員が、《黝い恋人たち》には託されている。銃撃戦を戦うために二人の、あるいは一四人全員の亡霊が山荘にあらわれたという設定は理解できる。としても銃撃戦に際して人質とされた管理人の女が一二年後に、屋根裏に棲みついた《黝い恋人たち》の子を受胎するという結末は感傷的にすぎる。

彼女は、既にしっかりとした母親の表情で、これからの歳月を生きて行く覚悟を固めていた。彼女は永く続くであろう暗闇と、聖母に加えられるであろう迫害にも耐えて、新しいのちを生み出そうと考えているのだ。遠く焦がれるような思いが、柔らかい胸をみたく。どこからか、バラの花の匂いが匂ってくる。

（あなたがたのすこやかな子供の母になれますように。あなたがた十四人の、すこやかな子供の母になれますように）

この女にもモデル人物が存在する。その当時、山荘を占拠した連合赤軍の兵士たちに浅間山荘の女性管理人は多少とも好意的だった、少なくとも一方的に非難することはなかったと報道された。人民戦争を戦おうとしていた連合赤軍は、もちろん無頼漢の集団ではない。「不拿群衆一針一線（民衆の物は針一本、糸一筋も盗るな）」など労農紅軍の三大規律・八項注意を拳々服膺していた革命兵士志願の青年たちが、銃撃戦に巻き

こんだ市民に丁寧な応対を心がけたのは事実だろう。それに人質のストックホルム症候群が重なれば、モデル女性が連合赤軍兵士たちに好意的だったとしても不思議ではない。

こうした事実を背景にしているとはいえず、作中の女性管理人を聖母マリアになぞらえ、「あなたがた十四人の、すこやかな子供の母になれますように」と祈らせるのはどうなのか。しかも「バラの花の匂い」まで添えて。連合赤軍事件を感傷の糖衣で包み、死者たちを叙情的に救済しようという桐山の作為は皮相ではない。作者に体質化されている叙情趣味が『スターバト・マーテル』では、浅薄なセンチメンタリズムにまで頹落しているといわざるをえない。

『テロルの伝説』には、桐山襲による書評「〈雪穴〉の向こうに」からの引用がある。(68年)世代の多くは、連続「総括」死という出来事を「政治そのものを越えたような未踏の場所における行いであること、自分たちの保有している政治の言語によっては十分に解ききることのできない問題であることを、直観していた」。だから「『事件』を大きな契機として、多くの者の永い沈黙の過程が始まらざるを得なかったのだ」。事件から一二年が経過した時点で「政治の言語」ならぬ小説の言語を用いてさえ、作者は『スターバト・マーテル』の結末が示すように叙情に溺れ感傷に逃げこんで、問題の核心から遠ざかるばかりなのだ。

連合赤軍は、飛翔した党派だった。どの組織よりも飛翔した党派だった。だから(略)彼らは、雪と、警官隊の重包围下の山岳地帯で、夥しい矛盾をそれぞれの個体へと集中させ、「主体の共産主義化」という方針の下に、個体の内面を一挙的に変革しようとしたために、数多くの兵士を死に至らしめていったのだ。それは「主体の共産主義化」という名前の死の舞踏——死に至る共同の自傷行為ともいっ

べきものだった。

連合赤軍が「飛翔した党派だった」という評価は間違っていない。正確には「飛翔しようとして失墜した党派」だが。「飛翔した党派だった」のは、父の世代が放棄した本土決戦を子の世代として完遂しようとしたからだ。一九六九年に結成された赤軍派がすでに、「革命」でなく「革命戦争」を主張していた。ロシア革命の武装蜂起と内戦や中国革命の遊撃戦を下敷きにしていたとしても、提唱者の意図を超えて「革命戦争」という言葉は(68年)世代の無意識に絶妙に作用した。

本土決戦を放棄し延命した支配層と民衆による共犯システムを打ち破らない限り、「いつわりの自由といつわりの平和でみたされた戦後」からの解放はない。このことを(68年)世代は暗黙のうちに了解していたから、未遂の〈本土決戦〉の遂行を意味する「革命戦争」は肯定され、少なからぬ者の支持をえた。

いうまでもないだろうが、赤軍派の〈革命戦争＝本土決戦〉に無意識を刺激された若者たちと、宮城事件の首謀者など軍の本土決戦派に共通するところはない。爆弾を携えた穂積一作が、皇居内ですれ違うクーデタ部隊と立場としては対極的であるように。

ずるずると敗北を重ねてきた無能きわまりない戦争指導部を打倒し、GHQ改革よりも徹底した社会的平等を実現する。軍を解体し、民衆的なゲリラ部隊を創設する。効果のない水際作戦などは中止し、アメリカ軍を日本列島に引きこんでゲリラ的な攻撃を加える。数十年という時間的射程で持続される解放戦争の業火によってのみ、一木一草に宿る天皇制と、日本人の宿痾であるニッポン・イデオロギーを焼きつくすことができる。これが〈本土決戦〉の意味するところだ。しかし赤軍派は、一九六九年秋期に計画された前段階武

装蜂起を前に大菩薩峠で壊滅し、革命戦争は開始されないまま終わる。

赤軍派の敗北を「銃をめぐる思想的な未決着」として総括したのが、赤軍派の残党と革命左派が結成した連合赤軍だった。「銃をめぐる思想的な未決着」とは革命兵士の「死をめぐる思想的な未決着」でもある。戦闘に際して銃を使用しうるには、敵を殺害し自分も殺害されうる思想性が前提だ。「主体の共産主義化」ようするに銃撃戦を遂行しうる主体に飛躍するための『総括』が山岳アジトではじまり、「死に至る共同の自傷行為ともいべき」連続死が生じた。

しかし「主体の共産主義化」とは、『スターバト・マーテル』に登場する銃砲店の主人が語るように「銃を手にかけることによって自分たちが変革されう得るという幻想」の産物にすぎない。そもそも連合赤軍世代の父たちは、みずから三八銃を棄て、「嬉々として(?)食糧や衣料を山分けして」復員したのではなかったか。「銃を手にかけること」は〈本土決戦〉や、パルチザン的な解放戦争の主体を自動的には産出しない。両者のあいだに口を開いた決定的な亀裂を人工的に埋めるために「主体の共産主義化」が、さらには死にいたる『総括』が必然化された。

小熊英二は『1968』で、「連合赤軍事件は、追いつめられた非合法集団のリーダーが下部メンバーに疑惑をかけて処分していたという点では、偶然でなく普遍的な現象である。(略)あのような状況と立場に置かれれば、その人間〔森恒夫や永田洋子〕のもっている特徴が醜悪な形態で露呈してしま」うのは当然だと語っている。しかし構成員の半分を「処分」するような「非合法集団」を、なんの疑問もなく「普遍的な現象」として一般化できるのは小熊くらいのものだ。連続『総括』死のように特異な出来事は、革命運動の長い歴史でも世界に類例がない。

小熊が語るように、もしも連合赤軍の犠牲者の死が「処刑」や「粛清」だったとすれば、〈68年〉世代が「保有している政治の言語」でも理解は可能だったろう。革命運動史のいたるところで「処刑」や「粛清」は繰り返されてきた。それをめぐる思想的な考察もドストエフスキイ『悪霊』、アーサー・ケストラー『真昼の暗黒』、アルベール・カミュ『正義の人々』、あるいはモーリス・メルロ＝ポンティ『ヒューマニズムとテロル』、埴谷雄高『幻視の中の政治』など、さまざまに試みられてきた。

しかし連続『総括』死は「処刑」でも「粛清」でもない。連合赤軍の一二人の死者のうち、自覚的に「処刑」されたのは二人にすぎない。残る一〇人は革命兵士への自己改造に失敗した「敗北死」、総括の援助(という暴行)に耐えられない結果の自然死として、死亡する直前の当事者を含め了解されていた。だから連続(総括)死は〈68年〉世代に、革命運動と殺人をめぐる二〇世紀の思想的考察の域を超えた出来事ではないかという疑惑を、否応なく突きつけることになる。それは異様に淀んだ、陰惨で不可解な印象を濃霧のように漂わせていた。この「事件」を大きな契機として、多くの者の永い沈黙の過程が始まらざるを得なかった」ゆえんだ。

『テロルの伝説』では連合赤軍の連続『総括』死を、モーリス・ブランショの『明かしえぬ共同体』のコミュノテに重ねようとしている。ブランショがジョルジュ・バタイユの秘儀結社アセファルを参照しながら論じた死をめぐるコミュノテは、しかし連合赤軍といかなる関係もない。革命戦士なら銃弾が当たっても死ぬことはない、そう信じていたとちに永田洋子は『十六の墓標』で書いている。こうした非合理主義的迷妄、普通人を特製人間に改造するための『総括』、『総括』に励んでいたら当事者が死んでしまったという無責任きわまりない自己弁護。いずれもがニッポン・イデオロギーの徒にふさわしい。

連続「総括」死と「処刑」や「肅清」を安直に同一視する小熊英二はまた、「連合赤軍事件は、六〇年代末からの若者たちの叛乱に終止符を打っただけでなく、その後の日本において、すべての社会運動を沈滞させるという悪影響をもたらした」ともいう。このように『1968』では、七〇年代以降の脱政治化は過激派が六〇年代に無展望に暴れすぎたからだ、という公安史観が無批判に踏襲されている。しかし、七〇年代以降の「社会運動の沈滞」は連合赤軍の自壊的敗北の結果ではない。連合赤軍が突破しようとして自滅した壁、戦後社会の「平和と繁栄」という壁を、「社会運動」は別の仕方で越えることが求められていた。それに失敗した結果として、「沈滞」が生じたにすぎない。

戦後民主主義的な合法主義や議会主義の観点からは、連合赤軍は「銃を手にすることによって世界が変革され得るという幻想によって滅んだ」ことになる。警備警察幹部として浅間山荘銃撃戦に対処した佐々淳行は「連合赤軍「あさま山荘」事件」で、日本大学の不正経理や体育会の暴力的な学内支配に抗議した日大生の運動は理解できたが、警官の殺傷を目的化した東大安田講堂闘争以降の学生運動は根絶しなければならぬと判断したと書いている。多数決と同義である「民主主義」の範囲内で、社会運動は合法的に行われなければならないことを連合赤軍事件は教訓化した。「暴力」も「軍事」も社会運動を孤立化させ、破滅に追いやる危険な罫だと警察官僚はもっともらしく語り、佐々の公安史観に小熊のような論者が唱和する。

東日本大震災と福島原発事故が起きるまで四〇年ものあいだ、日本は世界でも稀な「デモのない国」だった。西ドイツ赤軍やイタリアの赤い旅団は徹底性と残忍性という点で、連合赤軍の浅間山荘銃撃戦が子供の遊びに見えるような高度な軍事闘争、都市ゲリラ闘争を長期にわたって展開した。極左派の軍事闘争が権力の弾圧を招き、その巻き添えで〈68年〉の大衆的闘争が打撃を蒙った事実是否定できないが、だからといっ

てドイツやイタリアが日本のような「デモのない国」になった事実はない。〈68年〉以降も、緑の党が政権参加したドイツは「新しい社会運動」の、ジェノヴァ・サミット闘争のイタリアは反グローバリズム運動の中心地だった。

インドシナ人民戦争を頂点として〈68年〉には、第三世界の各地で人民解放のゲリラ戦争が戦われていた。ゲバラによる「第二、第三のヴェトナムを」という呼びかけに応じて、西側先進諸国でも都市ゲリラ闘争が開始される。先進国内で独立闘争を展開していたのがアイルランド共和国軍（IRA）やバスク「祖国と自由（ETA）」、プロレタリア革命をめざす新左翼の軍事闘争派が西ドイツ赤軍や赤い旅団だった。しかし先進諸国の軍事闘争派は、二大潮流のいずれもが社会的に孤立し公安権力との闘争に敗れ、最終的には都市ゲリラ路線の放棄にいたる。

インドシナでは人民戦争が勝利した直後から、ヴェトナムのポートピアブル問題、カンボジア虐殺事件、ヴェトナム軍のカンボジア侵攻、中越戦争などの否定的帰結が露呈されはじめた。またフィリピン、ネパール、ペルーなど世界各地の山岳ゲリラ闘争も終息していく。第三世界でも革命戦争路線の失効は、いまや疑うことができぬ。二一世紀では先進諸国でも新興国や発展途上国でも、都市ゲリラや軍事闘争の敗北という〈68年〉の教訓を学んだ大衆蜂起の形態が模索されてきたし、今後もさまざまに試みられていくだろう。

しかし連合赤軍事件には、こうした合理的な反省や教訓化で割りきることのできない特殊な過剰性がある。西ドイツ赤軍や赤い旅団はいわば、「銃を手にすることによって世界が変革され得るといふ幻想によって滅んだ」。であれば市民社会での都市ゲリラは有効でないと総括し、違う戦術や闘争方式に向かえばいい。しかし「銃を手にすることによって自分たちが変革され得るといふ幻想によって滅んだ」連合赤軍の場合、

問題はそれほど簡単ではない。西ドイツ赤軍や赤い旅団の場合のように、先進諸国における軍事闘争や都市ゲリラの無効性を教訓化して問題を終わらせるわけにはいかない。連合赤軍の困難な挑戦と無残な自壊的敗北は、われわれがニッポン・イデオロギーを超えるために繰り返し立ち戻らなければならない経験だ。

西ドイツ赤軍や赤い旅団の構成員たちは、日本と比較すれば易々と銃を手にし、易々と死を超えたように見える。少なくとも連合赤軍兵士のように、殺し殺されうる主体に飛躍するための「総括」や、それに類するイニシエーションを必要とした様子はない。第二次大戦の敗戦国であるドイツやイタリアにも欺瞞的な〈父たちの体系〉は存在したろうが、この〈父たち〉は少なくとも本土決戦を戦った。あるいはパルチザン戦争で戦争体制に抵抗し、独裁者を処刑した。

たとえばアントニオ・ネグリは、次のように語っている。「イタリアでは、一九四三年から四五年にかけて、たいへん強力な抵抗戦争が行われました。二十五年経った一九六八年にも、その記憶はまだ生きていました。というのは、反ファシズムの闘いは階級闘争と結びついていたからです」(『ネグリ 生政治的自伝——帰還』。四半世紀前に戦われたパルチザン戦争の民衆的な「記憶」が、赤い旅団による軍事闘争を思想的に支えていた。

八〇年代、それから一九九七年にイタリアに帰還してから、私が監獄生活をともにした「赤い旅団」の四人たちは、みな庶民階層の出身者です。彼らは本当に革命をしようと思ったのです。

権力のフレームアップで赤い旅団の指導者に仕立てあげられ逮捕投獄された、いわば赤い旅団のテロリズムに巻きこまれた被害者のネグリでさえ、「彼らは本当に革命をしようと思ったのです」と証言している。もちろん『赤い旅団』のことを、われわれを活性化した反逆の運動の全体を体現するものと勘違いしないように注意しなければなりません」と留保したうえでだが。

パルチザン戦争を戦った父の子であれば、「銃を手にすること」自体に過大な意味付与をする必要はない。誤りは「銃を手にすることによって世界が変革され得るという」発想に、いい替えれば先進諸国でも軍事闘争が有効だという戦略的判断にあった。他方、本土決戦から逃亡した父の子は、欺瞞的に延命した父を「銃を手にすることによって」超えられると信じた。未遂の〈本土決戦〉を完遂するものとしての革命戦争の主体に、「自分たちが変革され得るという幻想に」足を取られ、惨憺たる自壊的敗北に追いつめられたのだ。「銃を手にすること」は、銃を持つ私と銃で闘う私の二重化をもたらす。二人の私を分かち深淵は、「主体の共産主義化」によって埋められなければならない。

「主体の共産主義化」を実現するための「総括」は、革命兵士の思想性を身体化するために反復された。しかし暴力による規範の受肉という儀式は、ニッポン・イデオロギーの産物である教育的リンチに無限接近していく。本土決戦の回避が欺瞞的な戦後をもたらした以上、〈本土決戦〉の遂行だけが戦後社会を根底から変革するだろう。新たな〈本土決戦〉として革命戦争を戦う主体を生みだそうとして、しかし連合赤軍は曖昧な「終戦」に帰結したのと同じ無思考の罠に落ちてしまう。

問題はウロポロスのように循環している。本土決戦から自己保身的に逃亡した父の子が、欺瞞的な〈父たちの体系〉を打ち倒すため〈革命戦争Ⅱ本土決戦〉を開始しようとして連続「総括」死の沼地に追いつめられた。だが『スターバト・マーテル』の桐山襲は、連合赤軍事件が露呈したウロポロスの難題に直面して

はいない。『バルチザン伝説』では、バルチザン戦争を戦った理想的な父が仮構された。このような父の子であれば「銃を手にする事」に躊躇はなく、「主体の共産主義化」のための「総括」も不要だったろう。革命的祖国敗北主義に導かれて都市ゲリラ活動を展開し、欺瞞的な「終戦」を阻止するため「大逆」のテロルを企てた穂積一作は、しかし虚構の存在にすぎない。

軟弱な父の子が父を超えようと決意し、苦闘を重ねた。しかし真摯な努力は空転し、つまるところ軟弱な父の子はやはり軟弱であることを自己証明して終わる。軟弱をニッポン・イデオロギーに置き換えれば、問題は明白だろう。ニッポン・イデオロギーによって本土決戦から逃亡した父を批判し、新たな〈本土決戦〉として革命戦争を開始しようと決意した子たちは、自身もまぬがれていないニッポン・イデオロギーのため自己崩壊に追いこまれた。

連合赤軍の自壊と東アジア反日武装戦線の壊滅のあと、「平和と繁栄」の戦後社会は一九八〇年代後半のバブル的繁栄に登りつめていく。「小説においてもそうだが、桐山の内側には、一九八〇年代への深い絶望がある」（『テロルの伝説』）。その「絶望」は、第三作『風のクロニクル』に登場する人物の独白にも込められている。「わたしたちの敗北は、次の高揚期を簡単に手繰り寄せることが出来るほど、ささやかなものではありませんでした。やがて冬の中で、人と人とは、その紐帯を失ってばらばらになって行きました」。

私たちの叛乱の余波が、この社会の表面から失われていくにつれて、この国の社会そのもの、この国の人間の在り方そのものが、その根底から変っていきました。一九七〇年代という時間が、これほど不愉快なものになるとは、このときには、まだ誰にも予測できなかったのです。

桐山襲にとつて不愉快な時代は、一九八〇年代後半に絶頂をきわめたるう。昭和天皇の死、社会主義の崩壊、バブル経済の破裂、湾岸戦争。世界と日本の双方にわたる一九九〇年前後の激変を目撃してじきに、この作家は四三歳で世を去った。二〇一〇年代まで生きたとしても、桐山の不愉快は少しも解消されなかったはずだ。日本の〈68年〉の底部に木霊していた、〈本土決戦〉を革命戦争として遂行することで戦後社会の欺瞞を破砕しようとする意志は、この国から完全に失われたようにさえ見える。

『バルチザン伝説』の「僕」に託されたところの、自身の戦後責任を含め日本帝国の侵略責任を追及する思想は、新左翼セクトの形骸化した血債主義や文化左翼の応答責任論に頹落した。〈68年〉世代の大半は微温的にリベラル化し、「平和と繁栄」に異を唱えた戦後社会批判も、あるいは戦後平和主義／戦後啓蒙主義／戦後民主主義への批判も、いまや忘却の淵に半ば以上も沈んでしまったようだ。たとえSEALDsのオビニオンには、次のような箇所がある。

私たちは、対話と協調に基づく平和的な外交・安全保障政策を求めます。現在、日本と近隣諸国との領土問題・歴史認識問題が深刻化しています。平和憲法を持ち、唯一の被爆国でもある日本は、その平和の理念を現実的なヴァイジョンとともに発信し、北東アジアの協調的安全保障体制の構築へ向けてイニシアティブを発揮するべきです。私たちは、こうした国際社会への貢献こそが、最も日本の安全に寄与すると考えています。

この箇所だけ読めば、〈68年〉の思考では許容しがたい戦後平和主義的欺瞞への退行といわざるをえない。実際、〈68年〉を継承すると称するセクトや文化左翼が、そうした批判をSEALDsに浴びせていた。いずれにしても「戦前」が許せない以上に、いつわりの自由といつわりの平和でみたされた戦後こそが、僕たちには耐えることができなかった」〈68年〉世代と政治的にアクティヴな新世代との、思想感性から世界認識にいたる相違は歴然としている。「父たちの体系」を全否定することは、僕たちの世代のまぎれもない義務であり、大人たちの偽善の世界をこなごなに打砕くことは、僕たちの世代のほとんど唯一の存在理由であるように思われた」と語られたように、〈68年〉世代の戦後批判には教養小説的な父子対立という面が見られた。父の世代の世俗的な価値観に理想主義的な子の世代が反抗する。

しかし二一世紀の若者にしてみれば、戦中派と〈68年〉世代の父子対立になど関心のもちようもないだろう。世代対立が再生産されているなら話は別だが、すでに教養小説的な予定調和は失効している。父になった〈68年〉世代に反抗する理想主義的な子の世代など、いまやどこにも存在しない。

『バルチザン伝説』によれば、侵略戦争に動員された「者たちはひとりひとりの持つ血の負債に支払いを付けることもせず」に戦後を生き延びてきた。戦争末期に穂積一作は、「支配秩序を残したまま単に戦争だけを終わらせ」てはならないと語った。しかし「大陸の村々を焼きはらい、半島の女たちを強姦し」た戦中世代はすでに平均寿命を超え、じきに死に絶えるだろう。

「失われた二〇年」に自己形成した世代には、見える光景が〈68年〉世代とは根本的に異なる。戦後の「平和と繁栄」はすでに失われ、目に入るのは「戦争と衰退」の光景なのだ。〈本土決戦〉を戦うまでもなく、すでに日本列島は廢墟と化している。

労働人口の四割が非正規・不安定労働者で、経済的理由から結婚も出産も断念する若者が少なくない。子供の六人に一人は貧困家庭で食事も満足にできない状態だ。「失われた二〇年」の過程で進行した経済的衰退は、シャッター通り商店街の光景に象徴されている。〈68年〉が闘いを挑んだ空疎に繁栄する高度成長の戦後社会は、すでに形骸化し、あるいは事実として消滅した。

日米戦争を「終戦」にもちこんで延命した支配層は、念願の改憲再軍備と、戦時天皇制国家をモデルとした権威主義的国家再編を推進している。戦後の「繁栄」と同じように戦後の「平和」もまた、すでに失われている。北朝鮮と中国の軍事的圧力や泥沼化した世界内戦の脅威に対抗すると称し、特定秘密情報保護法や解釈改憲による集団的自衛権の行使容認、それに見合う戦争法案などが次々に強行されてきた。

一九五〇年前後に危機感を込めて語られた「逆コース」や「戦争と軍国主義への道」は、六〇年以上の間が経過した今日、急速に現実化してきた。進行する戦後「平和」国家の解体と二一世紀的な世界内戦国家の確立に抵抗しているのは、反原連／しばき隊／SEALDsなど。11後の新しい政治勢力だ。これと共闘しているのは、〈68年〉が敵とした戦後民主主義勢力である。〈68年〉に由来する運動は、限界集落化した新左翼党派をはじめ政治勢力としては消滅寸前といわざるをえない。

桐山襲が死の直前に目撃した内外の新事態、ソ連崩壊と湾岸戦争、昭和天皇の死とバブル崩壊などは二〇世紀の終焉を予示していた。そして四半世紀後、ようやく輪郭が見えてきた二一世紀という時代に、かつて未遂の〈本土決戦〉の遂行にまで先鋭化した〈68年〉の戦後社会批判や戦後思想批判は有効性を失ったように見える。

欺瞞的な「平和と繁栄」への批判は、欺瞞的であるにしろないにしろ「平和と繁栄」がそれ自体として失

われるのに応じて、しだいに無効化されてきた。その決定的なメルクマールが東日本大震災と福島原発事故だ。(68年)の戦後批判は3・11をもって最終的に失効し、もはや歴史的な遺物と化したといふべきだろうか。

爆弾製造に失敗して《昭和の丹下左膳》となった「僕」は、公安警察の追跡を逃れて沖縄に潜伏中であることが「第一の手紙」では語られている。「バルチザン伝説」でも点描された沖縄は、一九八六年に発表された長篇『聖なる夜 聖なる穴』で正面から主題化される。また八七年には、沖縄の離島を想像的な舞台とした長篇『亜熱帯の涙』も雑誌掲載された。その後も沖縄は、作家活動の最後まで桐山の特権的なモチーフとなる。

琉球処分以来、沖縄は日本に喰いこんだ刺だった。沖縄は北海道と並んで、もっとも早い時期に日本帝国が併合した新領土だが、沖縄「県」や北海「道」など日本国内の行政単位として位置づけられた点で、その後の台湾や朝鮮などの海外植民地とは性格が異なる。植民地でありながら、日本の内側に存在するという二重性が沖縄には刻まれていた。日米戦争の末期に沖縄「県」では、住民の四人に一人が死亡するという苛酷な地上戦が戦われたが、それを本土決戦とはいわない。

サンフランシスコ条約による日本の独立後も、沖縄ではアメリカによる占領が続いた。沖縄の本土復帰は一九七二年だが、それ以降も本土からの移設で米軍基地は拡大し続けた。日本の内にあり、また外にある沖縄は本土ならぬ〈本土決戦〉が行われた点でも、いまなお在日米軍基地の大半が集中している点でも、日本に喰いこんだ刺であることをやめていない。戦後も、そして本土復帰後も沖縄は、アメリカの属国という戦後日本の素顔をくっきりと映しだす鏡だった。

戦後平和主義も戦後民主主義も沖縄に犠牲を押しつけ、沖縄を排除することで成立しえた。日本の(68年)では、沖縄の本土復帰をめぐる政治闘争が最後の頂点をなしたが、その後も沖縄は戦後社会の欺瞞性を告発し続けている。3・11以前であろうと以降であろうと、沖縄が置かれた苛酷な条件に変わりはない。むしろ3・11以降の福島が、ある意味で沖縄化したともいえる。日本には沖縄に続いて、福島原発被災地域という第二の刺が新たに喰いこんだ。

米軍基地の重圧に押し潰された沖縄に本土並みの平和はない。反対の民意が民主的な選挙で幾度となく表明されても、辺野古の基地建設や高江のヘリパット移設工事は強行され続ける。沖縄に本土並みの民主主義はない。この点で謝花昇をモデルとした人物が登場する『聖なる夜 聖なる穴』は、二一世紀の今日もリアリティを失っていない。

——わたしの肉体が土の穴の中に埋められるとき、わたしは地の底の霊となって生きはじめるであろう。そして、やがて、わたしの狂気を引き継ぐ者が現れて来るであろう。沖縄の暗い地の底から、第一の敵を倒すために、わたしの狂気の名前を名のる者たちが、幾人も幾人も現れて来るであろう……

『スターバト・マートル』の『聖母』が宿した《黝い恋人たち》の子供は、流産なのか死産なのか生まれる前に死んでしまったようだ。連合赤軍の《革命戦争Ⅱ本土決戦》を継承する若者は、二一世紀の日本に一人として見つけることができない。しかし本土決戦と呼ばれない〈本土決戦〉が戦われた地には、いまもジャハナの狂気を引き継ぐ者たちが無数にいる。